
俺と勇者と魔王の伝説作り！！

夜秋雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と勇者と魔王の伝説作り！！

【Nコード】

N5544X

【作者名】

夜秋雨

【あらすじ】

普通の何の力も持たない俺こと黒條白兔は勇者の血を引くクラスメイトと魔界の王の結び目となる。

とある事件を解決しようとする勇者とそれに加担する魔王に襲いかかる魔物達は当然のように俺にも襲いかかって来て　って、完全にとばっちりじゃねえか！！

ストーリー構成と文章力はまだまだですが、できるだけ楽しんでいただけるように書いていきますので、どうぞよろしく願いします

!

プロローグ 全てはほんの偶然で……

「テメエ！ 待ちやがれ！」

「待てと言われて待つバカはいないっ！」

少年達の喧騒に包まれながら、俺こと黒條白兔くろえだはくとは商店街を逃げていた。

「絶対ぶつ殺す！」

「火炙りにしてやる」

とても怖いお言葉を次々と浴びせてくる少年達は地元でも有名な不良グループ。何度か殺人未遂まで起こしているらしい。

そんな不良グループに何故追いかけられているかと言うと、理由はとても単純だ。

学校帰り。俺はいつもとは少し違う道をフラフラしながら帰っていたのだが、ふと路地裏の入り口を見ると、少女が一人絡まっていた。『ちよつと付き合え』だの『一緒にいいコトしようぜ』だの、いつの時代のナンパだよ、と思った俺は軽い気持ちで言葉をかけた。

「お嬢ちゃん、俺が遊園地へ連れて行ってあげようか？」

……自分で言っというて何だが、それはとても危険な台詞に聞こえないくもない。

「何だテメエ？ 俺たちの邪魔すんのか！」

俺の存在に気づいた不良達はこちらへ振り返り、敵意を剥き出しにする。

「いやいや、邪魔なんて滅相もない」

そつ、俺は『邪魔』なんてしに来たんじゃない。

「『妨害』しに来たんだよ」

言葉と同時に、近くにいた不良の鳩尾に一発拳を決める。その不良は呻き声をあげながら、『い、意味一緒じゃねえか……』と器用にツッコミながら倒れた。

呆気にとられていた残り二人には記念として顔面にストレートをプレゼント。

そして仲良く二人同時に地面に伏せていったのだった。

「不意打ちが決まって良かった……」

正直、喧嘩になっていたら負けているところだ。我ながら完璧な不意打ちだと思いつながら少女の方を見ると、その少女は俺が知っている人物だった。

「結城さん？」

腰まである長い黒髪、端正整った美しさの中に可愛さも秘めたようなその顔は、間違いなくクラスメイトの結城聖月^{ゆづきみつき}さんだ。

男に言い寄られていた事もあり、突然声を掛けられてビックリしたのか、結城さんはビクツとしながらこちらを見る。

「く、黒條くん……？」

「絡まれてたのは結城さんだったのか……。絡む奴の気持ちも分かるよ。綺麗だもんな」

と、倒れている不良の肩をポンポン叩きながらそう言つと、結城さんは『や、やめてくれ！ 私は綺麗じゃないから……！』と顔を真っ赤にしながら、否定していた。

「ま、とりあえず、今の内に逃げておくといい」

そう言つて、俺は結城さんの肩を掴み、道路の方へ軽く押し出す。

「黒條君は帰らないのか……？」

「いや、今からちよつと用事があつてな……。めんどくさいんだけど」

「そうなのか……。じゃあまた明日、学校で」

「ああ。またな」

笑顔で手を振りながら帰っていく結城さんを、同じく手を振り返しながら見送ると、俺は路地裏の方へ向き返つた。

そしてふと不良を見ると、最後に殴つた二人の内の一人が携帯を握つて誰かと喋つていた。……かなりお怒りのご様子。

「ふむ。さて、俺は今からマラソン大会だな」

そう呟き、路地裏を全速力で後にした。

……と言つことがあり、今絶賛マラソン中。もう肺が悲鳴をあげているのだが、不良さんが諦めてくれない。

という事で、不良さんたちと話し合いで納得してもらおう。

「よし分かつた！ 分かつたから右向いて帰れ！ 四次元にな！」

「何が分かつたんだ！ 大体四次元ってどこだよ……！」

「みんなの心の中にきつとある……！ もしくは青い猫型ロボットの

ポケットの中！」

「行けるかああああ！！ テメエ、ダチを三人も殴つといて、タダで帰れると思つてんのかっ！？」

「その場の気分でやった。今だに反省していない。そして俺は悪くない」

「取り調べみたいに言うなあああ！！」

くそっ！ なぜ納得してくれないんだ！ これだけ必死に説得しているのに！

とりあえず何処かへ逃げ込もうと思つた俺は突き当たりの路地を曲がり、その先にあつた細い路地に逃げ込んだ。

壊れかけの自転車やら使われていない鉢植えやらがあつたが、そんな事にせずに俺は走る。

しばらく走っていると、不良達の声が聞こえなくなった。

ようやく撒いたか……？ と立ち止まってみると、そこは異様な空気に包まれていた。

薄暗い路地裏とは言え、どこから人の声が聞こえてきてもいいはずだ。だがそこは、この空間が切り離されたような静寂を感じ、暑くなつてきた初夏だというのに妙な寒気、悪寒を感じるのだ。

「何だよここ？ こんなに静かな場所あつたか？」

大体この辺りの地形は把握しており、ここもそれなりに人の声は聞こえていたはずなのだが……。

「とりあえず、さっきの道を帰るか。さつさとこんな気味の悪い場所を出よう！ そうしよう！」

そう言つて、俺が来た道を帰ろうとした瞬間。俺の頬を何かが切り裂いた。

「　　っ!？」

軽く切り裂かれた頬から、血がポタポタと流れ落ちる。

一瞬の事で反応できなかった俺は、細心の注意を払いながら振り返る。するとそこには『獣』がいた。

いや、獣とは言っても、ライオンやチーターといった『この世に実在する動物』ではない。

この世に『存在しないはず』の動物、ゲームの中にしかないようなそんな存在。そう『魔物』と呼ばれる存在だ。

その魔物は俺の身長の一、五倍はあるだろう巨大な身長。人間のように二足で地に立ち、狼のようにぱっくり開いた大きな口にはあらゆるモノを噛み砕きそうな牙が生え揃っている。体や腕には獣らしく体毛が全身に生え、軍人のような野性味を帯びた筋肉からは屈強さが見てとれた。手に生えた鋭く尖った爪はあらゆるモノを切り裂きそうな印象を受け、アレにまともに当たれば、今の頬の傷程度では済まないだろう。

「な、何だよコイツ……!」

俺はこの獣の存在を確認した瞬間。この世の見てはならない世界、裏側にある禁断の世界に飛び込んだような気がした。

獣人らしき魔物はその大きな腕を振りかぶり、俺を殺すために二撃目を放とうとしていた。

「くっ!」

左側に跳躍し、その攻撃を避ける。だが思っていた以上の力が出てしまい、着地に失敗した俺は足をくじいてしまった。

「くそっ！ こんな時にドジるとは……！ 所詮俺もドジっ子だったということか……！」

とか自分でも意味不明なことを言いながら、痛みを堪え立ち上がるうとしたが、次の瞬間、獣の三撃目が目の前を通過し、額から冷や汗が流れおちる。

だが、そこでふと疑問に思った。

（攻撃が定まってる……？）

確実に攻撃が当たる距離にも関わらず、さっきから一撃も直撃していない。

注意して見ると、獣の口からはヨダレがダラダラと滴り落ち、目は血走ってこちらを直視できておらず、ただ本能だけで俺を襲っている感じた。

それなら、と近くにあったビール瓶を少し離れた壁に投げつける。壁に直撃したビール瓶はガシャアン！ と大きな音を立てて砕け散った。

すると獣の注意はソチラへ向き、俺はその隙に獣のいる方向とは逆方向へ脱兎のごとく走る。足がかなり痛むが関係ない。

息を切らしながら数分走り、振り返ってみるとそこに獣はいなかった。

「ハア……ハア……に、逃げ切ったのか……？」

あ、危なかった……。それにしてもさっきの獣は何だったんだ？
ひと安心し、近くの壁にもたれ掛かった瞬間。

ドゴオオオン！ と大きな音を立て、すぐ隣の壁が弾け飛んだ。

「なっ　　！？」

とっさに身構えた俺だったが、すでに時遅し。
獣は大きく腕を振り上げ、俺の顔面目掛けて振り下ろされた。

「ぐっ　！」

.....。

来ない。

先程振り下ろされた腕が来ない。

俺は少しずつ目を開けていくと、そこには一人の少女が立っていた。
美しく靡く長い黒髪。俺の通う高校の女子制服から見える手足はス
ラツと長く魅力的で、相手が異性同性関係なく魅入ってしまう。
そんな凜とした雰囲気纏う少女の手には少し大きめな剣が握られ
ており、その剣で少女の二倍の身長はあるだろう獣を真つ二つにし
ていた。

「すまない。黒條くんを危険な目に遭わせてしまった」

そう、俺はその少女を知っている。

「ゆ、　」

クラスメイトであり、学校で人気ナンバーワンの女子生徒であり、
そしてさっきナンパから救った少女。

「結城さん！？　」

「すまなかった。黒條くんを巻き込む気は無かったのだが……」

そう言って結城さんは剣を背中の鞘になおしながら、俺の方へ近づ

いてくる。というか、結城さんが何でこんな化物と……？

「何故、私がこんな化物と闘っているのか分からない顔をしているな」

「あ、ああ……」

心の中を見透かしたように言う結城さん。そして重たそうに口を開こうとしたその瞬間。

ビッシャアアアン！ という雷が近くに落ちたような音と共に、辺りが一瞬で暗くなる。

「ッ ！？」

「な、なんだ！？」

目の前の空間に地割れのような亀裂が現れる。その亀裂は徐々に開いていき、そこから重々しい空気と闇が溢れ出す。

『フン、派手にやったもんだな？ 勇者様？』

凜々しさ溢れる声にも関わらず、ふざけたような口調をした男が亀裂の中から現れる。

黒マントを羽織り、奇抜なファッションをしたその男はまるでワイヤーで吊るされているかのようにゆっくりと降りてきた。

「その声は魔王か」

結城さんはその男を知っているらしく、頬に冷や汗を流しながらじつと男を見ていた。

「魔王！ 何故、この世界に魔物を放った！？」

声を荒げながら言う結城さんに少しビビってしまった俺。情けねえ……。

「俺が放ったんじゃないよ。最近おかしくなった魔物が増えてきてな……。俺も困ってんだ」

真つ二つにされた獣を見ながら、魔王と呼ばれた男は話す。

「まあ、こいつはこちらで回収しておくからよ。そう怒るな」

そう言つて、魔王は獣の死骸を持ち上げると、『じゃあな』と言つて再び亀裂の中へ入ろうとした。だが……。

「……あれ？ おかしいな。扉が開かねえ」

パスワードを間違えたようなりアクションをしながら慌てふためく魔王。……おい、何やってんだ魔王。今、かつこよく帰ろうとしたじゃねえか。

「畜生！ だからメンテナンスしとけつて言っただよ！」

「……結城さん。魔王ってあんなにカツコ悪い奴なの？」

「……いや、そんなことはないはずなんだが……」

結局三〇分くらい格闘し、ビクともしない亀裂に痺れを切らしたらしい魔王は、

「おい、その人間」

「……ん？ 俺か？」

「そつだお前だ。この扉が直るまでお前んちに住まわせろ」

「なああああつ

！？」

これが一般人だった俺と勇者の血を引く結城さんと魔王による物語の始まりだった。

第一章（１） 自宅に魔王が住んじゃった！？

結城さんのもう一面と魔王に出会った日の次の日。魔王は俺の家の居候となっていた。

現在、ウチのリビングで目玉焼き、味噌汁、白ご飯、サラダという朝御飯定番メニューを食っている。

「いやあ、やっぱり人間界の飯はうまいな！」

……………人間界に溶け込みすぎだろ。こいつ本当は人間じゃなからうか？

「お前人間界に溶け込みすぎだろ…………？ 服まで人間のもんになつてるし…………」

昨日は黒マントに王族が着るような豪華な服を着ていた魔王が、今は白いＴシャツにジャージのズボンといういかにも人間だ、という服装をしていた。

「気にするなよ。ハゲるぞ」

「それくらいでハゲる訳ねえだろ。バカ魔王」

「んだと？」

「あらあら。喧嘩しないのよ」

今のやり取りを喧嘩と思ったのか、一人の女性がキッチンからやってくる。

両手に持ったおぼんでお茶を運んできたのは、俺の母さんこと黒條陽子だ。

もう四〇歳近いにも関わらず、大学生に近い容姿を持ち、近所の奥

さん達から羨望の眼差しで見られている。
いつも見ている家族の俺が見ても二〇代に見えてしまうから不思議
でしょうがない。

「別に喧嘩じゃねえよ」

「あら、お母さんにそんな言い方して……。チューするわよ？」

「ハイイツ!? ちょちょちよつと待て母さん!! 頭は大丈夫か
!!!」

「バツチリ、イエーイ!!」

「もうダメだ……!!」

おい、ここに手遅れの精神疾患の方が一人いるぞ。
そんな心の声など気にすることもなく、母さんは魔王に料理を出し
ていく。

一皿、二皿、三皿、と増えていく食事に俺は思わず声を出す。

「出しすぎだろ!!」

「イケメン君、いっぱい食べてくれるから!!」

「ああ! まだいけるぜ!!」

「………………。まあ、それは分かった。でも何で快く居
候させたんだよ?」

あの出来事の後、俺と魔王の二人で家に帰り(家に帰る俺に堂々と
ついてきた)、母さんに事情を説明(家出というウソの事情)する
と、『ここに住みなさい!』と魔王を即刻住まわせた。

ちなみにイケメン君というあだ名は見た瞬間から呼んでいる。

「とってもイケメンでおいしそ コホンッ、可哀想だね……」

「おい、今『おいしそう』って言いかけたよな!? 危ないぞコイ
ッ!!!」

「おいテメエ！ 母親の事を『コイツ』呼ばわりすんじゃない！」
「そ、それは悪かった……。だがとんでもないことを言ったのは事実だ！」

「言つてねえ！ この人は何も悪くねえ！！ ちよっと口が滑っただけだ！」

「認めてんじゃないかよ！」

喧嘩の元凶となっている母さんは「あらあら、私の為に喧嘩しないでね」とか言いながら、リビングからキッチンへと引っ込んでいった。

「大体、お前本当に魔王なのか！？ 全く魔王らしさを感じねえぞ！？」

あんな次元を裂くような登場をされたから、魔界の存在は認めざるをえないが、人間界への適応力高すぎるだろ！？
本当に魔王なのか疑わしいコイツに確認を取る。

「ちゃんとした魔王だ！ 見ろ！ この証明書を！」

そう言つて俺に見せてきたのは履歴書のような一枚の紙。

……ふむ。『レイエスⅡルシファール』か……。今初めて名前知ったよ。

つてか

「名前しか読めねえよ！」

名前以外は象形文字のような記号が並び、何が書いてあるか分からない。

「ああそうか。名前以外は機密事項だった」

……コイツ、正真正銘のバカだろ。

「またアイツに怒られるぜ……」

「アイツ？ 魔王を叱れる奴なんているのか？」

「あ、ああ……。まあ、なんと言うか……。俺の婚約者なんだよ……。俺は認めてねえがな」

コイツ、婚約者なんていたんだな。半ば強制的みたいだが。

「つてか、魔界も人間界と変わらないんだな」

「ああ、お前らと姿形こそ違う奴もいるが、心だけは変わらねえ」

何かの自信を持ってそう告げたルシファア（これからこう呼ぼう）はふと一瞬、寂しそうな顔を見せた。

「じゃあ、その婚約者のことも認めたら」

「嫌だ。絶対認めねえ」

強情なやつめ。

「あら……。イケメン君、婚約者いるの……残念ね……」

「おい。いい加減にしろ」

いつの間にかキッチンから顔を覗かせていた母さんの言葉に、思わずツツこむ。

ツツこまれた後、非常に残念そうな顔を浮かべ、ルシファアが食べ終わった後の食器を持って再びキッチンへ帰っていった。

……自分の母さんながら危ないんじゃないか？ と思わなくもない。

「あ、そう言えば」

「なんだ？ 何かを思い出したのか？」

ルシファーが何かを思い出したような声を上げる。

何かを婚約者に頼まれたりしたのだろうか？

案外こいつも良いところあるのかも

「さっきの紙を見た奴は処刑、ってジジイが言ってた気がする」

前言撤回&この少しの間に俺の命が危なくなった。

第一章（2） 勇者と魔王が手を組んだ！

朝飯も終わった俺は家にルシファーを残して、学校に行く道を登校していた。

ルシファーの放ったさっきの一言のせいで周りをキョロキョロと見回してしまう。

（それにしても、魔物が俺たちと変わらない心を持つてるなんてな……）

昨日に襲われたあの狼のような獣からは全くそんなことを感じなかった。

感じられたのは目の前を動く物体を潰す、というような異常な破壊衝動だけ。

あの獣だけが特別おかしかったのか。

それは俺には確認できない。

「黒條君！」

考え事に耽っている俺に誰かが話しかけてきた。

声のした方を見てみると、走ってきたのは結城さんだった。

「おう、結城さん。今朝の調子はどうだ？」

「どこも変わって異常はない。黒條君も大丈夫か？ 魔王と住んでいるんだろ？」

自分の宿敵と住んでいる俺を心配してくれる結城さん。いい人だな

……！

「いい人だな……！」

「えええっ！？ く、くろえだや君！」

「ん？ 俺が何か言ったか？」

「な、ななな何でもないぞ！？ うん、何でもない！」

「？」

よく分からないが、何かに顔を真っ赤にして顔の前で手をバタバタ振る結城さん。

あと俺は聞き逃さなかったが、確実に今、結城さんは俺の名前を囁んだ。

……俺の名前など正しく発音する必要もない、ということだろうか……？

「まあ、今のところ俺も異常無し。あいつの環境適応力はすさまじいもんだよ」

「それなら良かった。あの魔王の先祖は遙か昔に天界を追放された墮天使ルシファーだと聞いていたからな……」

「ああ、それで『ルシファー』って名前が付いてんのか」

「そうだ。ルシファー家は魔界でも屈指の強さらしい」

「へえ……」

会話が途切れる。

ふと、結城さんを見ると何やら俯いて何かを口ごもっていた。

「ど、どうしたんだよ、結城さん！？」

「……く、黒條君は軽蔑したりしないか……？」

「軽蔑？ 何を？」

「わ、私が……その……あんな魔物と闘っていることを……」

「尊敬はしても、軽蔑はぜつたいにしない。カッコいいじゃないか！ 世界を守る勇者なんて！」

と言った瞬間。

何故か結城さんは悲しげな顔をした。
すぐに元の表情に戻ったが、俺の頭にはさっきの顔が焼き付いて離れない。

「結城さん、本当は」

「さあ、もう学校だ。早く行こう！」

俺の手を引っ張りながら、結城さんは学校への道を進んでいく。

「くそかったりい……」

現在、授業は四時間目。

淡々と続く古文の授業。すでに俺の耳は念仏として捉えてるらしく、全く頭に入ってこなかった。

しかも、もう腹が減って仕方がない。マジで早く終わってくれないかな……。

ふと時計を見ると、授業が終わるまで残り一〇分。もうすぐじゃないか！

さあ来い早く来い終われ終わるんだ！　と思って時計をじっと見つめるのだが、なかなか時計の針は動いてくれない。

「はあ。暇だな」

暇なので、結城さんのほうを見てみると、さすが優等生。ちゃんと

先生の話聞き、ノートを取っていた。うん、偉い。

そしてそのまま見つめること三分。見つめすぎて自分が危ない奴かと思えてきたよ……。

先生の声をボーっと聞いていると、突然教室にガチャン！！という大きな音が鳴り響いた。

が、それをクラスメイトが気づいている様子はない。唯一気づいているのは

「（結城さん！！）」

結城さんはその音に気付くと同時に席から立ち上がり、教室の窓から校庭へと飛び降りた。ってかここ三階だぞ！？

だがそんな出来事もみんなは気づいている様子がない。

慌てて窓から外を見ると、校庭に対峙している三つの影があった。

一つは先ほど飛び出していった結城さん。前に見た少し大きめの剣を持っている。

それに対するように反対側にいるのはドラキュラのような黒いスーツを着た男とカラスを人にしたかのような魔物だった。

俺も慌てて教室を飛び出し、階段を駆け抜け、靴を履きかえることもなく校庭に出る。

「結城さん！俺も力になるぜ！」

「黒篠君！？」

「ただの人間ごときがこの結界に入るとは」

ドラキュラはニヤリと笑いながら、こちらを見る。

「結界……？」

「そうです。今結界が張られた場所で動けるのは限られた人間のみ！例えばその勇者とか、ですかね」

そう言つて、ドラキュラは俺から視線を移し、結城さんを見る。
じゃあ、なんで俺は動けるんだ……？

と言おうとしたところで、先に結城さんが口を開いた。

「……黒篠君。ここは逃げてくれ。君を守り抜ける自信はないんだ」

「大丈夫だ。自分の身は自分で守る」

「だが　！！」

結城さんが何かを言う前にカラス人間のほうが我慢できなくなつたかのように襲いかかってきた。

大きな黒い右翼を上へ構え、俺の元へ一直線に走ってくる。ヘン、
こんなの単純

「黒篠君！　足だ！」

右の翼を上から下へ振りぬいたかと思うと、その勢いを利用し、空中で前転のように一回転。

そして伸ばされたカラス人間の足が俺の脳天に直撃した。

「ガ　　ッ！？」

前転の勢いを利用していたこともあつて、重い砂袋を上から思い切り投げつけられたような衝撃が脳天から足へと走り、激痛が遅れて全身を駆け抜ける。

そんな衝撃に普通の高校生である俺の体が耐えられるはずもなく、あつという間に地に這いつくばってしまった。

「ぐううう……！！」

視界は揺れ、口からはうめき声しか出ない。

体は動かず、指先にすら力が入らない。体と意識が離れてしまったみたいだ。

少し前のほうでは結城さんが魔物二体と戦っているのが見える。だが何もできない。

くっそおおおお！ 俺には何もできないっていうのかよおおおお！！

ただ這いつくばることしかできない俺は、自分の無力さ、弱さにただただ歯を噛み締めることしかできなかった。

そんな時。

「雑魚はソコで寝てろ」

聞き覚えのある声と黒い豪華なコート。その二つでそこにいるのが誰かすぐに分かった。

俺んちの飯をたらふく食いやがったアイツ。俺の母さんに妙に気に入られているアイツ。

そうアイツは

「ル……ルシ……ファー……？」

俺の意識はそこで途絶えた。

「フン、アイツは気絶したか」

ルシファーは自分の後ろで倒れている黒篠に目を向けてそう言った。

「おい勇者。お前はアイツの看病をしている」

「ど、どういふつもりだ……？ 私と戦うつもりじゃないのか？」

そう、勇者と魔王は本来敵対関係にあり、勇者と魔物二体が戦っているこの場では魔物側につくはずである。

が、それを魔王ルシファーは否定する。

勇者である結城聖月と共闘する、と言っているかのように。

ただの人間である黒篠白兔を助けるために。

「多対一は趣味じゃねえし、居候の家主であるそいつに死なれちゃ困るからな……。ほらさっさと行けよ」

聖月はコクリと頷くと、黒篠を抱えてどこかへ飛び去って行った。その様子をじつと見ていたドラキュラは目と口を引き攣らせ、血走った目で激怒したようにルシファーを見る。

「み、見損ないましたぞ！ あんな勇者に手を貸すなど……！ 魔界の歴史上、最大の汚点です！！」

横にいるカラス人間も同意見らしく、同じような表情をしながら激怒していた。

「最大の汚点？ それはだな」

ルシファーの言葉がドラキュラ達の耳に入った瞬間。すでにルシファーは二人の後ろにいた。

それに気付いた時、ドラキュラ達は後悔した。

喧嘩を吹っ掛けた相手を間違ったのだと。

もう少し冷静でいなければならなかったのだと。

だがもうすでに遅い。ドラキュラ達には見えなかったが、二人の体はルシファアの放った魔弾をともに受け、それに気づいた瞬間に彼らは肉片一かけらも残すことなく消滅した。

「お前らのことだろ……」

悲しげに言うルシファアの声が校庭に虚しく響いたのだった。

第一章（3） 後輩登場。でも立場逆！

「うつん……」

ふと目を開けると、目の前には心配そうに覗き込む結城さんの顔があった。

後頭部には暖かくて柔らかい感触。

俺今、結城さんに膝枕されてる？ あの男性の憧れの？

…… はーん、これは夢だな？

目が覚めるとルシファアの顔があつて、『うわあああ！』ってオチだろコレ。

なら、今の内にこの感触を楽しんでおこう！

……………。

アレ？ 目が覚めないな……。

うつすらと目を開けてみる。やはり結城さんの顔がそこにはあつた。

「ゆ、結城さん？ 俺今、膝枕されてる……の？」

恐る恐る聞いてみると、結城さんはトマトのように顔を赤くして、慌てふためきながら『い、いや違うんだ！ こ、ここは地面だからと思つて……！』と何故か言い訳みたいに言っていた。

「ゆ、ゆゆ夢の体験をありがとうございます……？」

そう言いながら、慌てて結城さんから離れる。

ああ……。気持ち良かったな……！ 結城さんの膝枕……！

「目、覚めたのか!？」

突然後ろから話しかけられた俺が振り返ってみると、そこにはルシファーがいた。

……ああ。そういえば、俺はコイツに助けられたんだよな。

「ありがとう。そしてごめん」

「感謝と謝罪はその勇者様にしろよ。お前を安全な場所に運んだのはコイツだぜ？」

ふと、結城さんを見てみると、俯きながら顔を真っ赤にしていた。
……なんで戦うときはあんなに凛々しいのに、普通の時はこんなに照れ屋なんだ！ 可愛すぎる！

「結城さん、ごめん。そしてありがとう」

「い、いや私は普通の事をしただけだ……！ ……でも迂闊に魔物の前に出るのは危険だから、それだけはやめてくれ」

「ああ……。今度は気を付ける」

「こ、今度は?」

予想していた返答と違ったのか、結城さんは驚いた表情を浮かべる。

「あの時の俺は本当に迂闊だった……。でもあと一回戦えば、何か
がわかる気がするんだよ」

「黒條君……」

「フン、雑魚のお前に何が分かるのか、楽しみだぜ」

ルシファーは何か楽しそうな表情を浮かべながら、フェンスの上に立つ。

そして「じゃあ、俺は家に帰るからな」と言い残し、この場を去っていった。

「自分の家みたいに言うんじゃない！！」

その叫びが聞こえたかどうかは定かではない。

するとちょうどいいタイミングで、学校中にチャイムが鳴り響いた。

「ところで結城さん」

「ん？ 何だ？」

「今何の時間？」

携帯を胸ポケットから取り出した結城さんは現在の時間を確認する。

「今ちょうど五時間目が終わった所だ」

「何だとおおおお！？」

せ、せっかく楽しみにしていた飯の時間が……！

かなりのショックを受けた俺は結城さんの手を引っ張り、とりあえず教室へ戻ろうとダッシュしたのだった。

「で、何で黒條先輩は五時間目に体育館にいなかったんですか！」

これは何かの間違いだ。

誰もまさか俺が放課後に自分の教室で後輩の女子に怒られるとは思わなかった。

五時間目は体育館で緊急の集会だったらしく、全学年合同だったらしい。

その時に俺の姿を探していたらしいのだが、見かけなかったため、こうして放課後に俺の教室へとやってきたらしい。

……何で俺を探す必要があるんだろうか？

ちなみにこの女子は風紀委員の雨音紗季あまねさきさんだ。

黒髪のショートヘア、顔はアイドルっぽく、生徒の間では可愛いと評判らしい。

体つきはスレンダーで綺麗なラインを描いている（上半身の一部を除く）。

「今、先輩を怒らなくちゃならない気がしたんですけど？」

「き、気のせいだ」

後、妙に勘が鋭い。これが女の勘ってやつだろうか。

「とにかく、なんで五時間目に体育館にいなかったんですか」

「い、いやそれはだ……？　ち、ちよつと用事があつて……な？」

「用事って何ですか！？　あ、もしかして結城先輩と何かしてたんですか！？　屋上で黒條先輩と結城先輩が一緒にいるところを見た人がいました！」

え？　話が変な方向に進んでない？

「全く……、学校で不純異性交遊だなんて……！」

「ちちち違うに決まってるだろ！！　何でそういう方向に話が進んでんだよ！？」

「私の友人が見たからです！」

と言うと、教室のドアから一人の男子生徒が入ってくる。

ソイツは俺の後輩の櫻葉智さくらばちだった。

すこしチャラついた茶色の髪に、耳にはイヤリングを装着。

顔は近所で話題になる程にイケメンで某事務所のアイドルに匹敵すると専らの噂。

学校の制服をかなり着崩しているのだが、風紀委員のおとがめは全くない。

雨音さん、怒るならまずアイツだろう。

でもそんなアイツと友達、というのだから不思議だ。

「プ。先輩が後輩に怒られてるなんて……！」

あの野郎……！ 後で絶対ぶん殴ってやる……！

「ってか、あいつは何で五時間目に屋上にいるんだよ!？」

「俺の直感力を侮らないでください！ 好奇心のくすぐられるところならどこでも現れます！」

「パパラッチか!!」

大体、俺たちがどういう関係かというと、さっき言っていた通り、先輩・後輩の関係であっている。

だが、雨音さん達が入学してきて二日後にあった、とある事件がきっかけで彼らと話すようになった。

その日、俺は先輩に呼び出され、校舎裏に向かっていた。

呼び出された理由はおそらく、その当時に荒れていた俺の態度が気

に入らない、というごく普通の理由だろう。

『全く、俺に構う暇があつたら勉強しろよ』

とそんなことを言いながら校舎裏に着いた俺。

さっさとやってさっさと帰ろうと思つて顔を上げると、俺の視界に飛び込んできた光景は許せないものだった。

一〇人くらいの不良が二人の男女に暴力を振るっていた。

いや、一人の男子が女子を庇い、全ての攻撃を一身に受けていた、というのが正しい。

男子は全身痣だらけになつても、口から血を流しても、女子を庇い続けている。

『おい、お前ら何やってやがんだ！！』

その言葉で俺がいることに気づいたのか、不良達の視線が一気にこっちに集まつた。

『おう、テメエが調子に乗つてるっていう　グボエ！？』

話を聞く気になんてならなかった。

ただただ、目の前の不良達が気にくわなかった。

まず先に前に出てきた先輩らしき不良を殴り飛ばすと、次に近い生徒から殴っていく。

途中、どこから持ってきたのか分からない鉄パイプやバットで全身を強く殴られたが、痛みなんて気にもならなかった。

そして気がつく俺は血まみれになつて、倒れている不良達の中心に立っていた。

『ちっ、不愉快なもん見たぜ……』

足を引きずりながらその場を去ろうとした俺の目にあるものが映る。庇われていた女子が、その庇ってくれていた男子を運ぼうとしていたのだ。

『私がこんなところに来たばかりに……！ ごめん……！ 本当にごめんね……！』

後に聞いた話だが、女子が不良達の格好を注意した事で、こんなことになったらしい。

泣きながら運ぼうとするが、やはり女子が男子を運ぼうとするのは無理があり、少し持ち上がるくらいだった。

『はあ……』

見かねた俺は女子に近づく。

女子は俺に驚いていたが、俺は気にせず男子生徒を背負うと、そのまま保健室にむかったのだった。

ちなみに保険医には『両方とも病院に行ってもらってから』と抵抗するまもなく、俺も病院に送られた。

その時の二人がこの後輩たちである。

「で、先輩。聞いてます？」

「ごめん。全く聞いてなかった」

と言った瞬間殴られた。

「全く……、あのかっこ良かった先輩はどこへ行ったんですか……」
「お空の星になったよ……」

ゴスゴスと頭を殴られる。意外と痛いんだけど……。そんな時、教室のドアがガラツと開く。

「何だ。黒條君まだ残っていたのか」

頭を擦りながら顔を上げると、そこには結城さんがいた。

「結城さん！ 助けて！ この暴力娘が っていだあっ！？ 肘で殴るなよ！」

「先輩が悪いです」

「そつだ先輩が悪いな」

「んだと！ テメエら先輩に向かってなんて態度を」

「ふふ、黒條君って本当におもしろいな」

わ、笑われたっ！？ ダメだもう俺、立ち直れない……。

「結城先輩！ 黒條先輩と屋上で何をしていたんですか！」

最初は何を言われているのか分からない顔をしていた結城さんだが、少しすると理解したのか、顔がボツと赤くなり、突然挙動不審になった。

「げ、幻覚を掛けていたはずなのだが……！」

小さな声で何かを呟いた結城さんだったが、その言動はより疑惑を

深めていく。

「やっぱり何かあったんですね!？」

「い、いや、なんにもないっ!？ 何もしていないから!！」

怪しすぎる結城さんをジロツと見ていた雨音だったが、「まあ、結城先輩がこんな先輩と何かあるわけですね」と言っ、なぜか俺の心に深い傷跡を残していった。

「黒條先輩、結城先輩」

櫻葉が突然口を開き、ある提案をした。

「せっかく四人もいるんですから、今からボーリングでも行きませんか？」

「ボーリング!? うん行こう行こう! 黒條先輩は強制ですからね!」

「選択権無しかよっ!？」

どうやら後輩二人は行く気満々みたいだ。

まあ、俺も楽しい企画には賛成だから行くけどな。

「わ、私はやったことないんだが……大丈夫かな……?」

「大丈夫! 俺が手取り足取り ゴブア! いちいち肘で殴ってくるな!」

「セクハラ発言は禁止です」

「なら暴力も禁止だッ!」

この後、結城さんも承諾し、四人でボーリング場へ行くことになった。

第一章（４） 心休まる場所と新たな問題

有名なボーリング場に来た俺たち四人。

ここにはボーリングの他にもカラオケやホッケー等、様々な娯楽施設が揃っており、飽きることがなく遊ぶことができる。

さっそくボーリング場の受け付けに向かった俺たちだが……。

「ご利用は五名様でよろしいですか？」

……ん？ 『五』名様？

よし、人数を確認してみよう。

まずは俺。そして結城さんに、後輩の雨音と櫻葉。そんで持ってルシファー……。

え？ ルシファー？

「何でお前がいるんだよ！？」

しれっとこのメンバーに入っていたルシファーに思わずツツこむ俺。いつの間に紛れ込んでやがったんだ！？

「俺の直感が楽しそうな気配を感じ取ったからな！ 俺も来てやつたぞ！」

どんな直感だよ！？ まあ、人数が多い方が楽しいし、良しとしておこうか。

こうして一人を追加し、ボーリングを開始した。

「よし、誰から投げるんだ？」

「じゃあ俺からいきますよ」

後輩の櫻葉が球を持ち、レーンの前に立つ。

「これがボーリングか！ 早く俺もやりてえ！」

「ちよつと待て！ これは順番だ！」

球を持って、違うレーンで投げようとするルシファーを俺が抑止する。

「じゃあ、行きますよつと！」

櫻葉が放った球は、綺麗なカーブを描き、真ん中のピンへと直撃。そこを起点としてすべてのピンが倒れた。

「うまいな櫻葉！」

「まあ、たまに家でやってますから」

そういえば、櫻葉は櫻葉財閥のお坊っちゃんだったな。家にこんな設備があるなんて、どんな家だよ。

「じゃあ、次は俺だからな！」

球を振り回しながらレーンの前に立つルシファー！。

あいつ、本当に楽しそうだな。

「黒條先輩、あの人は誰なんですか？」

雨音は隣のピンをすべて倒すという迷技を繰り出したルシファーを指差し、俺に訪ねてきた。

まあいきなり参加してきた奴だし、誰なのか分からないと不安だろ

うから教えておくか。

「ああ、あいつはルシファーと言って、海外から越してきたやつなんだ。今は俺ん家に居候してるけどな」

「ふーん、そうなんですか……。面白い人ですね！」

「まあな。日本に来たばかりだから少し日本人とは違う行動をするかもしれないけど、そこは許してやってくれ」

「そうですね。今も違うレーンでボーリングをしてるのは、まだ慣れてないからですよね！」

「へ？」

違う方向を見ている雨音の視線を追うと、そこには違う客達のレーンでボーリングをするルシファーの姿が。

「デメエ！そこは違うレーンだって言ってるだろうがあああああ
！！！」

少し子供を怒っているみたいで、他人の目が恥ずかしかった。

「さあ次は結城さんの番だ」

「あ、うん。そうだな……！」

俺はスペアという平凡なスコアで終了し、次は結城さんの番となった。

不安そうな顔でレーンに立つ結城さん。確か、ボーリングは初めてだって言ってたけど……。

今までの俺たちの動きを真剣に見ていたのか、俺たちを真似したかのようなフォームで球を投げると、中央のピンに吸い込まれるように球が曲がり、見事ストライクとなった。

「は、初めてでここまでとは…… すごい結城さん！」

「い、いや！ みんなの真似をただけだからっ！」

と謙虚に照れる結城さんはとてもかわいく見えた。

「よし、私もストライク取りますよー！」

「頑張れよ！ 紗季！」

桜庭の声援を受け、雨音がレーンに立つ。アイツはかなり上手そうだな……。

「行くよ！ エイツ！」

大きく振って投げた球は一メートルも進まないうちにガーターへ。……ごめん。俺こんな時のリアクション知らないや……。

「……先輩？」

「ん、んん？ な、何だ？」

「今の私の投球どうでした？」

ヤバイ。今少しずつ爆弾が近づいてきている……！ 下手なことをすれば、一回でドカーンだ……！

「う、うん！ こ、今度はもう少し頑張ろうぜ！」

そうだった瞬間。俺の顔面にアイアンクロウが炸裂した。

「さあ気を取り直して行こう！」

元気いっぱいの雨音の声。

端っこで倒れている俺を無視して、ボーリングが再開される。

この状態の俺を無視できるって、どんな神経してるんだよ……！

ずっと倒れているわけにもいけないので、顔を擦りながら立ち上がる俺。

すると、結城さんが濡れタオルを用意してくれていた。

「大丈夫か？ 大変だな黒篠君も……」

「まあ、アイツらが楽しいならそれでいいんだけど、物理攻撃はやめてほしい……」

いや、まず攻撃をやめてほしいと言うべきかここは。

「私もこんなに楽しいのは初めてだ。く、黒篠君も一緒だし……」
「ん？」

最後のほうが聞こえなかったのだが、結城さんも楽しんでくれているみたいで何よりだ。みんなが楽しめなかったら嫌だもんな。

そういえば、さっきからルシファアの声が聞こえないんだが、アイツはどこに行ったんだろうか？

あたりを見回ると、少し離れたところでボーリングの球をタワーのように積み上げている奴が一人。

「おい、何してんだ」

「ちよつと待て……、あと一球で一〇段だ……！」

そつと球から手を放すと、見事一直線にそびえ立つボーリングタワー

ーが完成した。おめでとう！
……じゃなくて。

「人様に迷惑かけるな。それで自分で片付けろよ」

冷たく言い放った俺の言葉にルシファーは渋々球を片付けていた。

……当然の代償だぞ。

そして時間は進み、ボーリングを終了した俺たちはこの施設の中にある他のゲームで遊びまくった。

「勝負だ勇者！」

「受けて立つ！」

と卓球で勇者対魔王というある意味ラスボス戦っぽい対決や、カラオケで櫻葉と雨音が意外な美声を披露したりする内にあっという間に帰る時間となっていった。

「あゝ今日は楽しかった！ 結城先輩！ 黒篠先輩！ また一緒に行きましようね！」

「ああ。手持ちに余裕があったらな」

「まあ、余裕がなくても誘いますけどね」

「櫻葉……、お前が余裕あるからってな……」

呆れたように言つと、雨音と櫻葉は「それじゃあ」と挨拶して帰っていった。

「結城さんは楽しかったか？」

「ああ。すごく楽しかった！」

満面の笑みを浮かべ、結城さんは心から楽しそうな声を出す。
その言葉を聞いて俺はホッとした。毎回あんな戦いを繰り広げている結城さんは、きつと心が休まる場所がなかったはずなのだ。
まあ、それは俺の勝手な意見を言っただけかもしれないけど、それでも結城さんにはこういった場所を作りたい、と思っって後輩の誘いに乗った。

それが成功して本当に良かった……！

「で、ルシファーはどうだったんだ？」

「ん？ ああ、俺もすっげえ楽しめた。礼を言っておく」

コイツが礼を言うなんて珍しいな。まあ、楽しかったみたいだしそれは喜ばしいことだ。

「じゃあ、私はこっちの道だから……」

「おう。気を付けて帰れよ」

「ああ。黒條君も」

違う道を歩いて帰る結城さんに手を振り、俺とルシファーは家へと帰るのだった。

「で、これは何だルシファー……？」

「い、いやこれはだな……？」

家に帰宅した俺の目に飛び込んできた光景は散らかりまくったりビングと、その真ん中に座る一人の少女だった。

髪の両側をリボンで結んだ、ツインテール少女はスタンダードなメイド服を着て、俺たちにこう言った。

「おかえりなさい。ア・ナ・タ？」

これはまた問題が一つ増えたのかもしれないな。

第一章（5） 危険なメイドと村人の信念

ボーリング場でみんなと遊んだ次の日。

「早く起きてください　起きないと……」

カチャ、となにか黒光りする危ない物体が俺の額に当てられる。
冷たいソレは、とあることをすれば、一発で俺を昇天

「って、冷静に解説してられるかああああ!!」

朝から俺は命を狙われていたのだった。

「で、何なんだよコイツは……」

俺のこめかみに危ない代物をずっと押し付けているこのメイドはなんなのか。

リビングで朝飯を食っていたルシファーに話を聞くことにした。

ちなみに母さんは朝早くに飯だけ作って出掛けていった。

「んあ？　そ、そいつは俺の　」

「お前の？」

何かを言おうとして口ごもる。何だ、なにか言えないことでもあるのか。というか、さっさと行ってほしい。じゃないと俺の頭から二

一禁的なモノ出して、昇天しちゃいそうだから。ほらほらコメディからホラーになっちゃうぞ

「そいつは」

「私はルシファー様の婚約者です」

可愛くウインクしながら言うメイド。いや可愛くねえよ。姿だけならいいけど、手にソレがあるとな……。『鬼に金棒』はよく聞くけど、『メイドに（自主規制）』は聞かねえよ？

「って、婚約者あああ！？」

「反応遅いです 後二秒遅ければコレの口から火を吹いてました」

ダラダラと額から嫌な汗が流れる。あ、アブねえ……！

「お前が言ってた婚約者ってこの人だったのか！？」

「あら、ルシファー様が私の話をしてくれてたんですか！ 嬉しい」

「……………チッ」

ルシファーの舌打ちと共に俺の右側でカチッと何かを下ろした音が聞こえる。や、やめて！ それ以上この人の機嫌を悪くするのやめて！！

「で、で？ なんでその婚約者が俺の命を狙ってんの？」

正直、ルシファーの婚約者うんぬんはいい。それよりも優先するは俺の命。とりあえず狙われている理由から探ろう。

「いえ、魔界の情報屋からこんな噂を聞きまして……」
「う、噂……？」

メイドは左手を頬に当て、ため息をつき、

「ルシファー様が魔界を見捨てた、と……」

え？ ルシファーが魔界を捨てた？

「いや、それは俺たちの世界に来た時、ゲートが壊れて
「ならどうして、私はここに来たのでしょうか？」

う……！ と言えばそうだ。ドラキュラやカラス人間もこちらの
世界に普通に來たじゃないか。
じゃあ、門の故障ってのは嘘？

「おい！ ルシファー、お前」

「それはどうでもいいんです」

へ？ それはどうでもいいの？

「それより、この人間がルシファー様の魔王証明書を見た、という
情報が入りまして……」

魔王証明書？ ああ、あの名前以外読めなかった紙か。

「その情報の漏洩防止のために来ました 私と結婚するか、この
人間が死ぬか選んでください」

笑顔でアレの引き金に指を掛けるメイド。

って、ちよつと待て！

「アレは勝手にコイツが」

「見せろと言われたから見せた……！ 見せなければ殺すと脅されていたんだ……！ だから一思いにソイツの命を……！」

「ルシファー！ テメエエエエエ！」

あの野郎！ 俺を売りやがったぞ！？ そんなに結婚するのが嫌か！ 俺もこのメイドは嫌だけだな！

「分かりました……。では、この人の命とルシファー様のキスで交渉成立です」

「ちよつと待つて？ 今一つ要求を付け足したよな？ キスなんて聞いてねえぞ！？」

「キス云々の前に俺を助けるよおおお！」

これが人生最大の叫びなんだと自分で思った。

数分後。俺の身柄は解放され、学校へダッシュしていた。隣には例のメイドもついてきている。

「な、なあ？ とりあえずその黒光りするモノをしまってくださいない？」

「なぜです？ あなたの命が狙えないじゃないですか」

「狙うな！ ……ってのもあるけど、町中でそんなもん出してたら捕まるからな」

俺も一緒に。

「そうなった場合、その人達を消してしまってもいいんですけど、ルシファー様の好きな人間界を壊れてしまうのもなんですし……。今は従っておきます」

そう言うと、メイドはアレをメイド服の中にしまった。

……しかし、口を開けば危ないことばかりで、ルシファーの気持ちも分らないことはない。大変そうだな。このメイドとの結婚生活は。

「で、お前何でメイド姿なの？ 普通の格好とかはしないのか？」

「まあ、元タルシファー家のメイドでしたし、私がこの姿好きですから」

「ふうん。で、アイツって魔界ではどんな風なんだ？」

「優しい人ですよ……。私が路頭で彷徨っていたら、突然現れて『俺の家で働け』と言って、寝床、食事をすべて用意してくれましたから……」

優しいところ有るんだなアイツ。

それはメイドの表情を見ただけでも分かるくらいだ。

「でも、なんで魔物が人間界に次々来るんだよ？ ルシファーがそんなことするはずねえし……」

それを聞いた瞬間、メイドの表情が暗くなる。

「それはルシファー家に相反するベルゼブブ家を始めとした四大家などの仕業だと思います」

そう言えば、結城さんが『ルシファー家は屈指の……』って言うってたもんな。最強と言わなかったことは力でまだ上の奴がいるってことか。

「魔物が人間界へ侵略するのを防ぐために、ルシファー様はこちらの世界へ来たのかもしれませんが」

「そうか。アイツはそれで『門の故障』だなんて嘘を……」

「ルシファー様は一人で抱え込みすぎです。婚約者の私にもっと言ってくださればいいのに」

「ったく、ホントアイツはなんでも一人で抱え込んでるんだな……。でも、アイツの気持ちも分からなくはない。きっとお前を巻き込みたくなかったんだと思う」

「私……を？」

ルシファーが魔界を抜け出し、人間界の魔物を倒した事が知れれば、きっとアイツは仲間殺しの烙印を押されるだろう。

そこにこのメイドを巻き込めば、他のやつらは魔王への攻撃だけでは飽きたらず、婚約者であるメイドにまで手を伸ばす。

だから、アイツはこの人を婚約者にしたくないのか……。

メイドという扱いならうまく行けば逃せるからな。

「……そうだな。お前はルシファーを信じて待つてろ。ルシファーは絶対にそんな奴等になんか負けねえからな！」

「……ふふ、貴方は面白い方ですね。ルシファー様が貴方の家に住んでるのも分かりますよ」

どっちかと言うと、俺は家主としてしか見られてないような……。

「そう言えば貴方の名前を聞いてませんでした」

「俺は黒條白兔。普通の高校生だ」

「私はヘレン＝アエリアルです。これからルシファー様をよろしくお願いします」

ヘレン＝アエリアルか……。これからアエリアルと呼ばせてもらおうかな。

「じゃあ、俺は俺なりにルシファーに協力してみるよ」

「分かりました。私も魔界で調べてみます」

そう言うと、アエリアルは人間離れた跳躍力で近くの家の屋根を次々と飛んでいった。

「よし……。学校で結城さんに相談してみるか」

結城さんなら協力してくれるはず。俺にできることはやってみせる！

「そうか。それで魔王は人間界に……」

放課後。一通り事情を話すと、結城さんは快く協力を承諾してくれた。

やっぱり優しいよな、結城さんは……！

「で、アイツは一人で解決しようとしているみたいだから、裏からサポートってできないかな？」

「まあできなくもないが、私は今もう一つの事件もあって、あまり

大きく動けないんだ」

もう一つの事件？ はて？ そんなのあったらどうか？

「黒條君は覚えているか？ 君が最初に出会った魔物の事を……」

「確か、狼の魔物だったよな？」

「これはその狼の魔物の体内で発見した」

そう言うと、結城さんはスカートのポケットから小さなクリスタルのようなものを取り出した。

「何だコレ？」

「これは『ドーピングクリスタル』と言って、魔物の理性と力を暴走させるものなんだ」

「なっ……！？」

じゃああの時、異常なまでの破壊衝動はコレのせいだったのか！？

「最近こいつが魔物の間で流行っているらしい。でもその大半は理性を失うことを知らずに飲むんだそうだ」

「騙されて飲まされてる、ってことか……」

いったい誰がそんなことをしてやがんだ……！ 魔物にだって心はあるというのに……！

「たぶん、その『魔物の人間界侵略』と、この『ドーピングクリスタル』の一件は繋がっているのかもしれない。私はクリスタルの件をメインに協力していく事にする」

「分かった。じゃあ俺は人間界侵略の方を調べてみるよ」

さて、話も終了したことだし、早速家に帰って方法を練らなきゃな。そう思っただち上がろうとした瞬間、結城さんにその手を掴まれた。

「ゆ、結城さん……？」

柔らかに暖かい結城さんの手は小さく震えていた。

「本当は君を私たちの問題に巻き込みたくないんだ……」

「結城さん……」

「危険な目に遭うかもしれないんだ……？　もしかしたら命を失うことになるかも知れないんだぞ……？」

一般人である俺にここで止まってほしいようなセリフ。確かに分かる。俺がもし結城さんの立場なら、絶対に一般人を関わらせないでおこうとするかもしれない。でも違う。違うんだ。

「それは違うんだよ結城さん」

「え……？」

「確かに俺は一般人だ。ゲームで言えば村人Aみたいな存在で、何の力もなければ、勇者のパーティにも魔王の配下にも就かないようなモブキャラだよ」

一呼吸置いて、言葉を続ける。

「でも、そんな俺でも只々、村で勇者が来るのを待ち続けるだけの勇者にすぎているだけの村人には絶対なりたくねえんだ」

自分で言っていて少し恥ずかしいが、それは俺の本音。

主人公じゃなくてもいい。特別なポジションなんていらぬ。村人で十分。でも待ち続ける村人だけは絶対にならない。それが俺の信

念。

「そうか……。分かった」

納得したような表情をする結城さん。い、今の発言引かれなかったかな？　すごい不安なんだけど……。そんな不安を吹き飛ばすように結城さんはこう言った。

「一緒に解決しよう。黒篠君！」

「……お、おう！！」

絶対に魔界の住人を、ルシファーを助けて見せる……！！

第一章（6） とある少女から語られる魔界の歴史

……で、何から調べていいのか分からない。

結城さんに『魔物の間界侵略』に関して調べるぜ！ と言ったのはいいものの、魔界の状況は俺には分からないし、情報を調べに帰ったアエリアルもいつ戻ってくるか分からない。

初っぱなから、手段ゼロと言っていいほど、手詰まりを起こしていた。

「はあ……。せめて魔界の様子とかを見れたらな……」

『ほな、見せたるか？』

突然聞こえてきた声に体を強張らせる。い、一体どこから聞こえてきたんだ！？

『ああ、ごめんごめん！ どこからゆうてるか分からんよな？ 今姿見せるから待っててな？』

突然、収納タンスの引き出しが開き、その中から一人の少女が現れた。それも驚きなんだけど、何で魔界から関西弁の少女が現れるわけ？ ……もしかして、魔界にも方言とかあるのか？

そんな事を思っている間に、少女は俺のベッドの上に座っていた。見た目は俺とそんなに変わらないように見える年齢の少女は、中に黒のタンクトップ、その上に淡い黄色の上着を着て、下には膝までのデニムパンツを履いていた。……えらく人間界っぽいファッションだな。

そして夕日を彩るかのように赤い髪を一ヶ所で束ね、ポニーテール状にしている少女の顔は可愛いと呼ばれるようなタイプをしていた。

「いやゝ、ごめんなゝ！ こつちに来んのは始めてやから、どこから出たらエエんか、分からなかったわゝ！」

「いや、別にタンスの引き出しから出てくる必要は無いんじゃない。未来の猫型ロボットじゃあるまいし……」

「ほんで自分、魔界の様子を知りたいんやったな！」

き、聞いてねえ……！

「あ、そうやそうや。自己紹介が遅れたわ！ ウチの名前はキャラル＝アミー。よろしくな！」

「あ、ああ……よろしく……」

おかしい……！ 全然自分のペースにすることも、相手のペースに乗ることもできないぞ……！？
しょうがない。個性的な自己紹介でペースを取り戻す！

「聞いて驚け！ 俺はこの世に蔓延る悪を成敗する正義の味方」

「ああ、黒條白兔やろ？」

惨敗したよ母さん……。せつかく中二っぽい設定まで考えたのに……。

「まあ、ルシファー家が治める魔界では有名やからなゝ、アンタ」

「へ？」

「だって、魔王と暮らす人間は、嫌でも有名になるやろゝ！」

マジで？ 魔界ではそんなことになってんの？

「普通、人間と魔界の住人が一緒に暮らすことはあらへん。……二〇〇年前なら即死刑や」

そ、そんなに厳しいのかよ、魔界って……。

「でも、レイエスⅡルシファアの親父さん、ロバートⅡルシファアが魔王になってから変わった。人間界と友好関係を築く事になったんや」

「へえ〜。そうなのか」

ルシファア家つてのは、人間界になにか特別な感情でも持っていたのかな……。

「でも、それに反対する王家はようけおった。それまで魔王だったサタン家を始め、ベルゼブブ家、ガープ家とかやな」

アミーは一呼吸おいて話を続ける。

「でも、ルシファア家の血筋は特別魔力が強く、勝てるもんはそうおらん」

「そんなに強いのか……」

でもじゃあ、その反対している王家はおとなしく従うしかないんじゃない……？

「だから勝たれへんて分かってる反乱軍が起こした行動は、『人間界に魔物を送り込む』という卑怯極まりない作戦やった」

「なっ……!!」

強大な力を持つルシファア家を狙わず、力が弱い人間の方を消そうとしたのか!?

「当然、ルシファー家は人間に荷担し、その王家達相手に善戦したんやけど……」

「したけど？」

それまで普通だったアミーの顔が、突然暗くなる。

「ロバート＝ルシファーはその戦争で戦死した」

「……！」

な、なんで！？ ルシファーの父さんの力は強大だったんじゃ……！？

「ある王家がとある一族の人間を催眠をかけ、ロバート＝ルシファーを暗殺したんや」

突然重みを増す空気。息を吸うのも苦しくなる。

「ロバート＝ルシファー死亡により、魔王の座は再びサタン家に戻るかと思われたんやけど……」

もったいぶるように話を区切るアミー。

「次に魔界の住人が選んだのは、ロバート＝ルシファーの息子、レイエス＝ルシファーで、サタン家に入れた奴は反乱を起こした奴等だけやった」

「人間と友好関係を結ぼうとするルシファー家の方がみんなに受けいられた、って訳か」

「そうや。それでサタン家率いる反乱軍はルシファー家への反対をやめた」

こうした歴史を経て、アイツは魔王になったのか。

「でも親父を人間に殺されたルシファーは、相当人間を恨んでるはずじゃ？」

「それはない。息子に父が最後に残した言葉が『決して人間を恨むな。この裏切りも魔界の欲望が産み出したのだから』やったらしいからな」

「じゃあ、ルシファーの父さんは裏切りに気づいていたのか？」

「ああそつや。でもそれでも人間に少しも敵意は向けへんかった」

「すげえ……！　どこまで男らしいんだルシファーの親父……！」

「で、裏切った人間ってどうなったんだよ？　他の人はその人が操られていた、なんて知らないんだろ？　ずっと憎しみの対象になったんじゃないか？」

「しばらくは非難、差別の嵐やったみたいや。でも長い時間が経ち、みんなの記憶からは忘れ去られていった」

「今でも裏切った人間の血筋って生きてるのか？」

その質問にアミーの顔が真剣味を増す。それを見て俺も唾を飲んで聞く事にした。

「裏切った人間の一族。それは勇者の血を引いた一族の事や」

その瞬間、俺の息は止まるかと思った。……ゆ、結城さんの一族が裏切った……！？

い、いや操られてたから、裏切ったのとはまた違うけど、それでも

「まあ大分昔の話やし、その勇者様がどこにおるかは知らんけど、

今でも罪の意識は引き継がれてるはずや」

「ゆ、結城さん……」

それで俺が『勇者はカッコいい』って言ったとき、一瞬暗い顔をしたのか……。

「でも、何でアンタそんなに戦争詳しいんだ？ 見た訳じゃないんだろう？」

「そや？ 見た訳じゃないけど、ウチの親がルシファー家と親しかったから、色々と情報は手に入るしな！ それにレイエスとも何回か遊んだことあるで？」

そ、そういうものなのか……？ なんか、いいとこのお嬢様みたいな会話だったな……。

「で、話を本題に戻すで！」

いきなり声を大きくするアミー。
と、突然何だよ……？

「アンタ、魔界の様子を見たかったんやな？」

「あ、ああ……。そうや じゃねえ、そうだ」

思わず関西弁が移っちゃったじゃねえか。

「ほんじゃあ、ウチが一週間で人間用転送ゲートを作ったる！」

へ？ そんなの作れんの？ ってか、魔界に俺が行くの？

ベッドから飛び降りたアミーはタンスの中から色々な道具を取り出す。な、なんだ？ ほとんどがホームセンターに売ってるような物

ばかりだぞ！？

「ってか、なんでお前は俺に協力してくれんだよ！？」

別にこの俺に直接的な繋がりがある訳じゃないし、ルシファー家繋がりで、ここまですてくれるのはおかしい。
なにか、裏があると思ったのだが

「まあ、ルシファーの友達つてもあるけど、アンタはアエリアル
の友達らしいからな！ 友達である二人の友達は、ウチの友達でもある！ だからここまで来たんやから！ ……あれ？ 『友達』言
い過ぎてワケわからんなった」

予想外の一言に俺は息が止まる。

「……………え？ アエリアルが俺の事を友達って言ってたのか……
？」

「ああ！ 『男の友達は初めてです』って言ってたで！」

あのメイド、そんな事を言ってくれたのか……！ な、何だか目から
塩水が出てきやがったぜ……！
アミーはドリルやら木材やらを持つと、

「じゃあ、今から工事開始や！」

で、一体何処を工事するんやろ？ ……ハッ！ また移った！

工事開始から三日後。

アミーの気分転換も兼ねて、俺と後輩の櫻葉と雨音の二人、そして結城さんとルシファアの合計六人で遊園地に遊びに来た。

……分かるよ？ お前らそんなことしてる暇があるのか、って俺ですら分かるもん。

でも、息抜きは必要だと判断した俺は無理を承知して、みんなを誘った。するとみんな、快くオッケーしてくれたのだった。

「よう、久しぶりだなアミー」

「そうやな。何年ぶりや？」

「八〇年ぶりくらいじゃないか？」

「せやな。あん時はお互いに生意気な子供やったからな」

お前ら一体何歳なんだ？ 聞くのは何だか危険な香りがするので、とりあえずやめておこう。

「せや！ レイエス！ あん時のウチとの決着ついてへんで！」

「そういや、そうだったな！ よしここで決着を着けるか！」

え？ まさか戦闘するの？

「や、やめろよ？ ここには一般人が」

「どっちが先にジェットコースターで酔うか勝負だ！」

「受けてたつでー!!」

……………俺の心配返せ。

そんな俺の心の声も知らず、ルシファアとアミーはジェットコースターのある方向へ走って行ってしまった。

「黒條君、今の会話はこの二人に聞かれても良かったのか？」

はっ！？ 今結城さんに言われて気づいた！

恐る恐る見ると、櫻葉と雨音はニコニコと笑っていた。

「あ……あれ？ 二人は今の会話、おかしいと思わなかったのか？」

普通の人が聞けば、絶対おかしく聞こえる会話だったのに、二人は普通に笑っていた。

「ええ、先輩。別におかしいと思いませんでしたよ?」

「そうですよ？　だって私達」

二人は一呼吸置くと、声を合わせてこう言った。

「魔術師ですから！」

「なつ……！」

「ええええええええええ！？」

突然のその言葉に、俺と結城さんは衝撃を隠せなかった。

第一章（7） 少しの間の休憩

俺たちは一瞬耳を疑った。

ええっ！？ この二人が魔術師！？

……………ん？ よく考えてみると、魔術師だから何なんだ？

「結城さん。魔術師って一体…………？」

「魔術師とは様々な魔術が使える者の事だ。昔は勇者の一族と行動を共にしていたのだが…………」

心底言いくそうに顔を曇らせる結城さん。

昔ということはあの戦争の事が関連しているのか…………？

そこは紳士の黒條白兔。結城さんにしか聞こえないように耳元で話しかけた。

「（まさか、あの戦争か…………？）」

「……」

突然顔を真っ赤にした結城さんは、驚いたかのように一歩後ろへ退く。…………やっぱりタブーな事に触れたから、俺を警戒してるのかな…………。

「う、ごめん結城さん。お、俺」

「み、みみみみみ耳はダメだっ！ なんかくすぐったい感じがするっ！」

……………なんか、俺まで顔が熱くなってきた…………！

耳まで顔を真っ赤にしてモジモジする結城さん。か、可愛いっ！！

「……ハイハイ、そこでベタベタしないでくださいーい」

氷のように冷めた目線でこちらを睨む雨音。

「べ、別にベタベタしてなんか……」

「う、うん。そう！ ベタベタなんか……ベタベタなんか……」

どンドン結城さんの声のボリュームが小さくなっていく。

「……そんなことしたら、黒條君に迷惑が掛かってしまう……」

「え？」

何が何だか聞こえなかったが、少し元気がないようだ。……こんな時に戦争の話をしたら、余計に結城さんを傷つけてしまうだろう。ここはおとなしくしておく方がいいな。

「でも、二人が魔術師なんてな……。って事は結城さんやルシファ―なんかの事情は全部分かってるのか？」

俺の質問に雨音と櫻葉は軽く頷き、「はい、一通りは」と答えた。

「そっか……それならいい。よし、今日は遊びまくるか！」

「……えっ？ 黒條先輩？」

ちよつと楽しみにしていたジェットコースターへ行こうとした俺は、櫻葉に呼び止められる。

「何で俺らが黙っていたのか、とか聞かないんですか？」

「え？ 何で？」

すぐに返した言葉に呆気を取られたのか、キョトンとした顔をする二人。そんな変なこと言ったかな……？
すると、雨音が慌てたような顔で声を出した。

「ふ、普通気になりませんかっ！？ 後輩が魔術師なんですよ！？」

「いや、こういった事態にもう慣れたし……」

「な、慣れた！？」

いきなり魔物に襲われたり、家に魔王が居候したり、クラスメイトが勇者の血を引く人だったり、突然メイドに殺されかけたり、タンスの引き出しから関西弁を喋る少女が現れたりして、もう大抵の状況に慣れてしまった。

後輩二人が魔術師と聞いた時、最初こそ驚いたが、すぐに納得してしまったし……。

「うん、やっぱりそこまで衝撃はなかったな」

「そう……ですか。先輩は私達に興味がないんですか……？」

「確かに『魔術師』には興味はねえ。関わってるって言っても、あんまりそちの世界の事も分からねえしな。でもお前達『個人』は別。後輩でもあり、友達でもある二人には興味がありまくりで、引いちゃうくらいだぞ」

「……………」

最後にウィンクをしながら言ったのが気に入らなかったのか、櫻葉は苦笑い、雨音は軽蔑の表情を浮かべていた。

「さ、行こうよ櫻葉くん」

「そ、そうだな。うん、行こう」

何かを警戒するように俺を避けながら、二人はメリーゴーランドの方向へ走って行ってしまった。

「ちよっ！　そういう意味の興味があるじゃないって！！」

手を伸ばしながら叫んでみるが、時すでに遅し。

周りに立っていた人達から、『見てあの人。男女二人に変態的な告白をしてたわよ。きっとバイよ、バイ』なんていうとんでもない声が聞こえてきたのだった。

「あの二人、嬉しそうだったな……」

突然、結城さんがそう呟いた。

嬉しそう？　俺からじゃ表情は見えなかったけど、すごい気持ち悪いものを見るような態度だったような気が……。

「さ、私達も行こうか。黒條君！」

「あ、ああ……」

結城さんに手を引かれ、俺はジェットコースターの方へと向かうのだった。

「次はアレに乗ろう！」

俺の手を引っ張り、次に指差したのは、円形のステージに馬や馬車

が設置してある、メリーゴーランド。子供やカップルがニコニコしながら乗っており、とても楽しそうなのだが……。

「な、なんかカップル比率の方が高くて、の、乗りにくい……」

乗っている殆どが男女のカップル（なのかどうかは知らないが）で、俺としては気まずいことこの上ない。結城さんは平気なのだろうか……？

俺がそんな事を思っているなんてつゆ知れず、結城さんはメリーゴーランドの順番待ちの列に並ぶ。

するとそんな時、前方のカップルからこんな声が聞こえてきた。

『ここか？ 二人一緒に乗ると離れなくなる、という噂があるメリーゴーランドは』

『そうよ？ このメリーゴーランドには二頭の馬がペアのように並んだ場所が一つだけあって、そこに一緒に乗れば、二人は永遠に結ばれるらしいの！』

『ふ〜ん。噂が本当か嘘かは分からないが、乗らないわけにはいかないな』

『愛してる……』

と、一見普通の会話だが、この会話をしている二人は男である。…

…そ、それぞれの愛の形とやらがあるのだろう……！

そんな二人の会話は耳に入っていない結城さんは、目を輝かせながら順番を待っていた。

（その噂が本当なら、結城さんは俺なんかと乗っていいのだろうか……。お、俺的にはすごい嬉しいんだけど……）

もっと大切な人ができた時に来た方がいいんじゃないのか、とは思

つたが、もう既に列の中腹。途中離脱はできない。
そして待つこと数十分。俺たちの番が回ってきた。

「はい、どうぞ！」

係員のお姉さんに案内され、二人はそれぞれの馬に乗る。
するとそれは二頭が横に並んでいるペアの馬だった。

「べ、ベタな展開来たあああああ！？」

「ど、どうしたんだ黒條君っ！？」

ハッと係員のお姉さんを見ると、親指を立てて、『頑張れ！』的な表情をしている。お姉さんが仕組んだ事だったのか……！

少し取り乱した俺を慰めるかのように、結城さんは俺の左手を握ってくれた。

さっきから思っていたが、結城さんの手はすごく暖かくて心地がいい。なぜだか分からないが、心の底から安心感が込み上げてくる。

「落ち着いたか……？」

心配そうに見る結城さんに俺は「あ、ああっ！」と裏返った声でしか返事ができなかった。

そしてメリーゴーランドが動きだし、俺と結城さんは揺られながら辺りの景色を見ていた。

「黒條君」

「ん、何？ 結城さん」

返事をしてから結城さんの方を見ると、少し微笑んでいたのが分かった。

「今日はありがとう。私達に気を遣って誘ってくれたのだろう……？」

「ま、まあ、たまには気分転換でもしないと、思ってたな……」

「ふふ、黒條君は優しいな……」

「そ、そんな事、なな無いって！」

女性にあまり『優しい』と言われた事がない俺はその言葉にかなり動揺してしまう。

や、ヤバイ……！ か、顔が熱くなってきた……！

「ふふ、顔が真っ赤だぞ」

「い、いやこれは暑いだけであって、別に照れてる訳じゃ……」

「私は別に『照れてる』なんて言っていないぞ？」

からかうように言われ、俺はさらに顔が熱くなり、何も言えなくなってしまう。

しばらくするとメリーゴーランドも終了の時間が訪れ、ゆっくりと回転を停止していく。

「楽しかったな黒條君！」

「ああ、楽しかった！」

メリーゴーランドを出て、近くのベンチで座っていると、どこから物凄いスピードで走ってくる影が一つ。

誰だ？ と思って見てみると、その影は俺に向かって突撃してきた。

「ちょ、ちよっとスピードを　ぐばああああ！？」

激突してきた影によって俺は吹っ飛び、近くの地面に背中を強打す

る。

「ゲホツゲホツ!! いつつ……。一体誰だよ!?!」

「なんや、この程度の突進も止められへんのか?」

こ、この関西弁は……。と思って見てみると、そこにいたのは案の定、ツインテールの魔界人アミーだった。

「な、何でいきなり突進……?」

「いや、なんとなくや」

「何となくで人を吹っ飛ばしてんじゃねえええ!!」

「まあ、そういうなや。ウチもテンションが上がってんねんから! やっぱり遊園地は楽しいな!」

「そ、そうだったのか……。楽しんでもらえて何よりだ」

楽しそうにニコニコしているアミーを見ると、誘って良かったな、と思う。

「ところで、ルシファーはどこいったんだ?」

アミーと一緒に消えていったはずのルシファーがいない。

「ああ、アイツならな」

「連れてきましたよ!」

「ぐはっ!」

突如聞こえた女性の言葉と共にルシファーがごみ袋のように投げられる。

その女性の声の正体は雨音だった。

「雨音か！ ルシファーはどこにいたんだ？」

「ジェットコースターの鉄骨にいました」

「鉄骨？ 鉄骨ってまさか！？」

「はい。ジェットコースターの鉄骨の上で、やってくるコースターを飛んで避けるというゲームをしてたんですよ」

どれだけ危険なことをするんだアイツは……！ ってかあの野郎……！ 周りの人に不自然な行動を見せるなよ……！ 注意しようとルシファーの方へ振り向くと、アイツは体育座りのままいじけていた。

「最近俺、魔王として扱われてなくね？ さっきもごみ袋のようにポイされるってどういうことだよ……。っーか、出番すら少ないし」

出番なんたらはさておき、確かに魔王としての風格は失われつつあるルシファー。そこはデリケートな部分なので、あんまり触れないでおこうか……。

「先輩。最後にみんなで観覧車に乗りませんか？」

雨音と共に帰ってきていた櫻葉がそんな提案をした。

みんなで観覧車か……。今日はあんまりみんなで遊んでないもんな。

「よし乗るか！」

ということ、最後に観覧車に乗ることになった俺たちは、すぐに観覧車のあるエリアに着き、早速乗車することにしたのだが……。

「なんでデメエと二人なんだよ」

「それはこっちのセリフだ！」

なぜか俺とルシファアの二人という組み合わせになってしまった。自分の前方の籠を見てみると、四人が楽しそうに話しているのが分かる。

一つの籠に六人は多すぎるっていうのは分かるけど、なんでコイツと二人なんだ……！ あっちのほうじゃ楽しそうじゃないか……！

「おい」

「な、何だよ？」

突然話しかけられ、焦った声を出してしまう俺。

「この遊園地のことだけだよ……。一応感謝はしてるからな……」

照れくさそうに言うルシファア。

いつも思うけど、こういう時は素直なんだよな。……いや、やっている行動も素直っていえば素直か。

「お前、俺がなんで人間界に来たか分かってるんだろ？ だから気遣って俺をここに連れてきたんだろ？」

「……………ああ」

コイツは気づいていた。俺がルシファアの目的を知っていることに。そして俺を説得するようにこう言う。

「でも、これは俺の問題だ。一般人のお前が出しゃばる場面じゃない」

言い方こそ違うが、結城さんと同じで『一般人を巻き込みたくない』と言っているのだろう。

それは分かつてる。分かつてるけど、俺は
と、言葉を発しようとした瞬間。全身に異様な寒気が走った。

「っ
!?」

観覧車から辺りを見回す。が夕焼けに染まる空と海や、遊園地の中
の人、アトラクションが見えるだけで、怪しいものなんかない。き、
気のせいだったのか……?

と思った時、沈みゆく夕日をよく見ると、小さく一つの影があった。
眩しくて見えづらいが、あれは人っぽい形をしている。

「どうしたんだよお前？」

「お、お前にはアレが見えないのか？」

俺は人影がある方を指差すが、『何もねえけど?』と言って違う方
向を向くルシファア!。

もしかして俺にしか見えていないのか? とそんなことを思ってい
るうちにその影は姿を消してしまった。

(な、何だっ たんだアレは……?)

アレが何だったのか分からないが、そうこう考えている間に籠がス
タート地点に着いてしまい、俺たちは観覧車を降りたのだった。

あれから四日後。

「できたで〜」

自宅のリビングでくつろいでいた俺にアミーがそんなことを言った。

「できた？ できたって何がぶおうふ ！！」

「お前の脳みそは赤みそでできとんのか？ 転送ゲートができたゆうてんねん！ 早よせえ！」

「い、いちいち殴る必要があるか！？」

殴られた頭をさすりながら、自分の部屋へ向かう俺とアミー。
するとそこには引き戸版ど でもドアらしき扉が立っていた。

「お前、もしかしてド えもん好きか？」

「何の話や？ ウチが好きなんはキテ ツ大百科や」

「うん、ごめん。俺が聞いたいてなんだけど、この話やめようか。」

……で、このドアを入れれば魔界に行けるのか？」

「ああそや。でもどこに転送されるかわからんから、きいつけや！」

「ええっ！？ いきなり危険な場所に転送されたりしねえよな！？」

「………………。早よ行くで」

「今の無言は何ッ！？ ちよっ、待って！ 嫌な予感がするいやあ

ああああああ ！！」

抵抗する暇もなく、俺はアミーに服の裾を引っ張られ、引き戸版ど
こで ドアの中へと入っていったのだった。

第二章（１） 魔界に到着！ でもここ何処だ？（前書き）

第二章突入！

いつも読んでいただいている方、そして今回初めて読んでいただいている方、本当にありがとうございます。

所々読みにくいところや意味が分からないところが正直あると思います。

なのでお手数だとは思いますが、『ここはこうした方がいいんじゃないか』というお気づきの点、他にもご意見・ご感想等がありましたら、どんどん報告してください！

これからも『俺と勇者と魔王の伝説作り』をよろしくお願いします！

第二章（１） 魔界に到着！ でもどこ何処だ？

『……………テ』

何か声が聞こえる。……………女性の声だ。

『タ……………テ』

タテ？ もうちょっと、もうちょっとハッキリ言ってくれば……………！

『タ……………ケ……………テ』

「ぐほおっ！」

何かを望むような女性の声は、俺の例えることが不可能な声でかき
けされた。

は、腹が……………！ 中身全部出る……………！

「いつまで寝てんねんボケ！」

きつい関西弁に目を覚ますと、そこには俺の腹を踏みつけるアミ―
がいた。

べ、別に俺の腹を踏んで起こす必要はないんじゃない……………。

「で、魔界に着いたのか……………？」

辺りを見回すと、鬱蒼と生い茂った草木や夜みたいに暗く重々しい
空。

どこを見ても夜の森っぽく見えるのだが……………。

「一応な。でも、ここは進入禁止区域の森や。多分野生の野獣族がうようよ出てくるやろな」

「そうか。進入禁止区域の森か……。え？　今なんて？」

「今、自分でもゆうたやん。ここは『進入禁止区域』やって」

.....o

ということ、俺たちは今とても危険な状態ってことか？

でもコッチには強そうなアミーがいるし、大丈夫なはず

「ああゆうとくけど、ウチは戦闘とか出来ひんからな」
「な、何で？」

「うち、戦闘苦手やねん」

「『やねん』
『じゃねえええええ！』」

だから言ったじゃん！いきなり危険な場所に出るんじゃないかって！今完全に予想通りになってるぞ！？

「まあまあ、そんなに慌てたらアカン。一旦落ち着き」

「何か策でもあるのかよ……」

「ないな」

一回本気で頭をどついてやろうかコイツ……！

「でもな、ここの野獣は力がごっつい高い代わりに遭遇率が低いね

L

ガサツ、と音を立てて近くの草むらから、俺が初めて出会った狼に似ている魔物が出現。

「……遭遇率がなんだって？」

「いや、ウチは何も言っていない」

「オイッ！　ってこんな所で漫才をしている暇はない！　アミー！
何か策はないか!?」

「こつちから行かんければ、襲いかかってくることは」

大きな腕を振りかぶり、俺の喉元を切り裂こうとする二足歩行の狼。
……殺る気満々じゃねえか。

「仕方ねえ！　アミー！　何か粉末状のもの持ってねえか!?」

「い、一応コンクリの粉があるけど？」

「何であるのか知らないが、それでいい！　ちょっと貸してくれ！」

アミーは鞆をゴソゴソ漁り、中からコンクリの粉が詰められた袋を取り出すと、それを俺に投擲する。それを受けとると、俺はアミーに向かってこう言い放つ。

「よし、サンキュー！　アミーは先に逃げろ！」

「自分はどうするんや!?」

「俺は後で追う！　だから早く逃げてくれ！」

渋々「分かった」と頷くと、アミーは木々の間へと走っていった。

「さて、俺は遊んでいきますかね」

正直、その遊びで命を失いそうだが。

「でも、そう簡単に俺の命を貰えと」

そう言った瞬間に、狼の鋭く尖った爪が俺の目の前を通りすぎる。
……距離があつたから良かったけど、死ぬ、ホントに死んじゃう！

続けて相手は一步踏み出し、上から左腕で攻撃を仕掛けてくる。それが分かった俺は、右からの攻撃にも備え、狼の左側を転がるようにして避けた。そしてアミーから受け取ったコンクリ入りの袋を破り、相手が振り返った瞬間、その粉を思いっきり浴びせかける。

（よし、今だ！）

粉を浴びて油断した狼に全身全霊のタツクルをお見舞い。俺も一緒に転んだが、狼も少しはダメージを受けたらしく、小さく呻き声のようなものをあげていた。

（……今のうちに逃げよう！）

俺は狼から全力で逃げたのだった。

そして、それから走ること数分。

何やら湖のような場所に俺は出ていた。

神聖な雰囲気醸し出し、そこだけ昼間のような明るさをした湖は、見る者の心を惹き付けるような感じが出ている。

「ちょうど喉乾いてたし、ちょっとだけ飲ましてもらうかな」

両手で水を掬い、それを口に付けて飲む。

「……な、なんだこの水！ スッゲー美味しい！」

その美味さに驚きながら、二、三回その水を飲むと、俺は一応持ってきていたペットボトルにも給水しておき、アミーを探すために立ち上がった。

（アイツ、また魔物に出会ったりしてねえよな？）

心配になった俺は、もう一度森の方向へ戻ることにしたのだが、そんな折、俺はあることに気づいた。

「体が軽いぞ！」

水分補給をして、かなり体力を回復したらしく、体がすごく軽くなっていた。……これなら魔物から小細工無しで逃げれるかも知れないな！

「アミー！ 聞こえるか〜！」

叫んでみても返事がない。遠くの方へ逃げたのか……？

魔物に遭遇していないことを祈りつつ、俺はアミーの搜索を継続する。……警察かよ。

そして一時間ほどが経った。が、アミーが見つかる気配はない。

「うーむ。アミーは何処へ行っただろうか……」

探しても探しても、見つかる気配がない。……まさか、魔物に出会ったとか？

一抹の不安を抱えながら森を歩いていると、一つだけポツーン、と建った小屋を見つけた。

ホントに人間界の森みたいだな、と思いながら小屋のドアを開けると、そこは本当に普通の小屋だった。

壁に暖炉があり、その近くには童話で出てくるような椅子が。

壁一面の本棚には様々な本がビッシリと詰め込まれており、ここに住んでいる人は読書好きとすぐに分かる。

「すみません」

呼び掛けてみるが返事は無し。

その後も二、三回呼び掛けるもいずれも返事はなかった。
留守なのか？　と思つて小屋のドアを閉めようとした瞬間。突如として人の声が聞こえてきた。

『今は五時ですよ？』

時間なんて誰も聞いていないのに、時刻を伝えてくる声。
声の高さから恐らく女性だと思つんだけど……。

「ここに赤髪のツインテールの子は来ませんでしたか？」

『赤髪のシャ　クスなら私もファンですよ』

「話が噛み合つてねえ！？」

合つてたの『赤髪』くらいだぞ！？　しかもなんでワ　ピース知つてんだ！

ふと本棚を見ると、そこにはワン　ース全巻が揃っていた。つか魔界でも売つてんの！？

よし、ちゃんと聞こえるように言おう。たぶんアッチはちゃんと聞こえてないだけだ。

「ここに女の子が来ませんでしたか！」

『はい、私は女の子ですよ』

「微妙に違うッ！」

でも今度は『女の子』は合つてた。つてことはこの人、一言だけを聞き取つてる！？

「……女子訪問！」

なぜか四字熟語みたいになったが、これなら聞き取ってくれるはず……！

『四字熟語は得意です！』

「何で心の声を読むんだ！　ってか得意ってなんだ！」

もういい！　アミーは居そうにないし、さっさと行こう！

……　と思いドアを閉めた矢先、振り返った俺の目の前に一人の女性が立っていた。

「うおっ！？」

暗い森の中でキラキラと光る長い銀髪。まるでカラーコンタクトをしているかのような綺麗な青い瞳はとても印象的。

セーターとロングスカートを着ていても分かる体つきは雨音にも見習わしてやりたいくらい。

そんなおっとりとした雰囲気をした女性は俺の顔を見て、ニコリと笑った。

「で、どうされたんですか？」

「あ、ああ！　ちよつと知り合いを探してまして……」

「先程言っておられた赤髪の女の子ですか？　それなら私の小屋にいますよ」

「えっ？」

そう言つて女性は小屋の中へ入っていく。……え？　『私の小屋』
？　じ、じゃあさっきまで喋ってたのはあの人？

「この方ですよね？」

その声と共に出てきたのは、先程の銀髪の女性と寝ぼけ眼のामीだった。

「ふわぁ……いやーすまん。ここに逃げ込んだはいいけど、つい寝てもうたわ……」

「ほう……俺が必死になって探している間に、お前は寝てたのか」

「い、いや？ 寝るつもりはなかったんやで？ で、でもつい」

「良かったよ。お前が無事で」

「え……？」

魔物と遭遇してなくて本当に良かった。ホッと一安心していると、ामीはなぜか怒ったかのような顔をしていた。な、何なんだ？

「いきなりそんな事ゆうなんて、ズルいわ……」

声が小さくて聞こえなかったが、怒っているようなのでそっとしておこう。

「お知り合いが見つかって良かったですね」

会話が途切れるタイミングを待ってくれていたのか、銀髪の女性が俺に話しかける。

「ありがとうございます。え、えーと……」

「私はミシエルⅡアストレットと申します」

「あ、俺は黒條白兔と言います」

お互いに握手を交わし、もう一度俺はお礼を言った。

「お二人はどちらまで行かれるのですか？」

……俺はあまり魔界について知らないから、アミーに答えてもらおう。

「ここは何地方や？」

「ここは……確か」

二人が話している地名等を聞いても全く分からない。誰か俺に地図をくれ。

そうこうしている間に話終えたのか、アミーが俺に向かってこう言った。

「この近くに町があるから、そこまで行くか」

「また魔物に出くわさないだろうな？」

「大丈夫や。次はこの人も一緒やからな」

そう言っ指差したのは、アストレトさん。……え？ どゆこと？

「この人はこの森全てを管理する凄腕の魔界人やからな」

え？ こんなにおっとりした人が？

「それは昔の話ですよー！ 今は強くありませんからー！」

「何言うてんねん！ こないだも襲いかかってきた野獣族を次々となぎ倒してたやないか！」

照れたように笑うアストレトさん。いや、あの狼とか相手に余裕なの？

すると、アストレトさんは数冊の本を買い物バックのような鞆に入

れると、ドアを開けてこう言った。

「さ、行きましょうか？」

その言葉に頼もしさと一抹の不安を抱えながら、俺たちは再び森へと進んでいくのだった。……大丈夫かコレ……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5544x/>

俺と勇者と魔王の伝説作り！！

2011年10月27日17時11分発行